

呉美妊著『安部公房の〈戦後〉：植民地経験と初期 テクストをめぐって』

中野，和典
佐世保工業高等専門学校准教授

<https://doi.org/10.15017/19890>

出版情報：九大日文. 16, pp.71-73, 2010-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

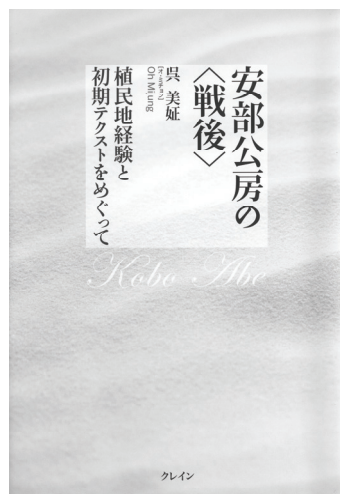
呉美姫著

『安部公房の〈戦後〉』

——植民地経験と初期テクストをめぐって

NAKANO Kazumichi
中野 和典

本書の美点は、安部公房の初期作品を解釈する基点に彼の植民地経験を据えることの有効性を示したことにある。安部は「夜の会」、「世紀の会」、「人民芸術集団」、「下丸子文化集団」、「現在の会」、「記録芸術の会」等、それぞれに異なる理念を掲げた芸術集団に参加しながら多くの創作をしたが、それゆえに彼の作品群に「一貫するもの」を捉えるのは容易ではない。むしろ、



安部は変貌し続けた作家なのであり、そこに「一貫するもの」を求める必要はないという見方も成り立つ。しかし、あえて特定の視

点から安部の作品群を読み込み、断絶しているように見える作品群に「一貫するもの」を探究することによって、初めて見えてくる「広がり」や「深まり」もある。本書の戦略は「おわりに」に明記されている。

本書では、安部公房のテクストを植民地経験、そして（戦後）という時代性と関連させながら考察してみた。安部を安易に日本文学史の異端児として規定する態度に疑問を持ちながら、彼をあらためて（戦後）という時代の中で捉え直してみたかったのである。それはまた、一人の作家のテクストを通じて、戦後文学に通底する思想なり、理念なりを捉えてみたいという思いでもあった。そこで、安部の（満州）での植民地経験とアメリカ占領下の経験というものが、彼の文学世界にどのような陰影をつくり、どのような方向性を与えたのかを分析してみた。それはある戦後作家が自らの植民地経験と闘いながら、たえずそれを現在の足元へひきよせ、時代と向き合っていく姿に立ち会う作業でもあった。

安部の作品群と戦後の芸術集団との関係を探る研究は、比較的早いものとしては岡庭昇『花田清輝と安部公房——アヴァンガルド文学の再生のために——』（一九八〇・一、第三文明社）、近年のものとしては鳥羽耕史『運動体・安部公房』（二〇〇七・五、一葉社）等があるが、本書はこの関係を植民地経験と関連づけて問い直すことによって新たな解釈の地平を開いている。

『終りし道の標べに』を考察した第一章では、この小説に描

かれる「私」の〈挫折〉を、敗戦にともなう〈植民地出身の日本人のアイデンティティ・クライシス〉が招いた、自己を規定する〈故郷〉という起源へ遡る作業〉の破綻と意味づけ、それによって〈むしろ起源の不在〉が明らかにされていることを論じている。

変身譚を考察した第三章では、「デンドロカカリヤ」に描かれる〈外地〉を植民地の隠喩と捉え、〈外地〉を出自とするデンドロカカリヤの隔離が〈戦争の傷跡〉の隠蔽を暗示していると指摘している。さらに、〈見ばえのしない菊に似た〉と形容されるデンドロカカリヤを戦後日本の諷喩と捉え、その被支配状態によって〈占領〉という現実〉が〈植民地的現実〉に等しいことを示していると論じている。

『東欧を行く』を考察した第六章では、安部が彼の植民地認識を制約していた〈コミュニケーション・フィルター〉から脱していく様を読み取っている。具体的には、安部の東欧体験を、コミュニケーション内部に〈宗主国と周辺国とのヒエラルキーとナシヨナリズム的な対立〉が存在しているという〈内部の亀裂〉への自覚が生まれた契機と捉え、このようなコミュニケーションズムからの離脱の過程と〈初めて安部が満州体験を正面から扱っている〉『けものたちは故郷をめざす』の執筆へ向かう過程が一致していることを論じている。

『けものたちは故郷をめざす』を考察した第七章では、この小説に描かれる日本と架空の地・巴哈林との差異の消失が〈満州人かつまた日本人であり、移民かつまた植民地であるという

二重性によってもたらされたアイデンティティの危うさを問い直すこと〉を促し、〈所与のアイデンティティ自体の不確定性を発見していくプロセス〉を露呈させていることを論じている。

『砂の女』を考察した第八章では、この小説が書かれた六〇年代以降に〈安部を非政治的な〈純〉文学的作家として取り扱っていく傾向〉や〈安部公房に対する決り文句である「無国籍主義者」、「コスモポリタン」というイメージ〉が生まれた背景に、植民地経験に基づく〈ナシヨナリズム的心情〉の否定があったことを論じている。

このように植民地経験へ立ち返り続ける安部の初期作品が、自明のものと見なされがちな故郷やアイデンティティ、戦後に強い政治的求心力を持ったコミュニケーションズム、被占領意識に対抗して生まれた反米ナシヨナリズム、等を相対化した結果、安部公房作品を「無国籍性」によって評価するという傾向が生まれたことを明らかにした呉の手際は鮮やかである。そして、本書は晩年の安部によるクレオール言説についての考察を補論として加えたことで、より魅力的な研究書になっている。晩年の発言を射程に入れることによって、植民地経験に根ざす安部の問題認識を、初期だけでなく晩年の作品にまで「一貫するもの」として提示する可能性を開いているのである。

安部のクレオール言説を考察した補論では、安部がピッカートンの語る〈新しい地域社会〉に〈中心―周縁の二項対立的なヒエラルキー〉を潜在させる〈辺境〉という概念を代入していること、また、ピッカートンの語る〈移民〉に、実はそれが植

民であつたことを捨象する（棄民）という概念を代入していることに安部の「限界」を見出ししている。呉によれば安部の「限界」とは（植民者側の眼差しが完全に払拭されているとは言いがたい）ことであり、それは被植民者の土地を（辺境）とイメージして無人地扱いしようとしたり、植民者を（棄民）とイメージして被害者扱いしようとしたりすることに表れているのである。

この安部の「限界」についての指摘は、彼の「無国籍性」の強度を問い直す上で極めて重要なものである。もし安部が故郷や伝統を否定する一方で、晩年にいたるまで植民者の眼差しに囚われ続けていたのだとすれば、彼の「無国籍性」自体に一つの「限界」があつたことになる。この指摘が妥当なものであるならば、安部の植民地経験は彼の視野を広げると同時にそれを制限する「足枷」にもなつていたことになる。

むしろこの補論は、晩年のクレオール言説を分析したものに留まつており、その他の作品、特に『箱男』『密会』『方舟ざくら丸』『カンガルー・ノート』といった後期作品を射程に入れ

ていないという意味では、まだ安部の「限界」の根拠を十分に示したものにはなつていない。しかし、安部の植民地経験が単に彼の「無国籍性」を保証するものではなく、むしろそれを問い直す基点にもなりえることを見出したことは呉の慧眼である。今後、本書が提示した問いに向き合うことなく、安部の「無国籍性」を論じることができなくなるに違いない。不用意に安部の「無国籍性」を称揚することは、彼の「国籍性」を覆い隠すことにつながりかねないのである。

このように補論で提示された問題が刺激的であるがゆえに、本書は残された課題を自ら明らかにしている。植民地経験という基点から後期まで含めて安部公房作品を分析したとき、果たして何が見えてくるのか。安部の「無国籍性」はどれほどの強度と可能性を持つているのか。呉の更なる研究の成果に注目したい。

二〇〇九年一月 クレイン 二五六頁 二五〇〇円＋税

（佐世保工業高等学校准教授）